

# 週刊 学びのコミュニティ

第33号

平成21年11月18日発行



今回は、先日韓国で行われた、興味深い学会での体験から感じたことをご報告いたします。

10月30日～11月3日まで、韓国全羅南道珍島郡の珍島で開かれた『珍島学会』に参加した。ソウル大学人類学科の全教授・崔教授始め、ソウル女子大学、山口県立大学からも教員、学生の参加があった。そのほかにも台湾や沖縄石垣島からの研究者、社会人の参加もみられ、教員、学生とも国際色豊かな集まりであった。

この『珍島学会』は、珍島の伝統的な祭祀を再現し、民族の根底にある死生観を今に伝えようと開かれているもので、地元の人々が行う祭祀のありようを我々も体験し、その意味について島の人々と語り合い、感じ合うものであった。

おそらく、各地域の風土によって祭祀の表現形態は違ったとしても、民族を超えた共通の死生観のようものが我々の奥深くにも横たわっているのだろう。島の人々が繰り返す死から生へ、哀悼から祝福へ、その途切れることのない魂の転生の捉え方に、心が開放される思いがあった。

学会に参加し、民族の歴史や伝承というものを通じて様々な国の人々と触れ合えたことは非常に刺激的であったが、一歩下がってこの学会が持つ意味と我々

の取り組みとを照らし合わせてみた時、本取組の本質的な部分に触れた感もあった。この珍島での祭祀は、無くなりゆく運命にあるように思う。それは世界のどこでも、もちろん日本でも見られる自然な現象なのかもしれない。まるで人が生まれ死んでいくように。しかし、珍島の人々の死生観は死が始まりである。生は死から始まり、新たな命が吹き込まれる。自分の存在が無くなるのではなく、次への生を生み出す源になると考える。

なぜ学ぶのか。生涯学習とは何か。知の循環とはどのようなものなのか。私たちが織りなす人間関係の中に、生まれては死に、死んで生まれ変わる『知』という形ないものが巡れば巡るほど、より洗練され、蘇る力を持つのだと思う。それは人から人へ、世代や地域や国をも越え、繰り返して伝道される普遍的なものとして受け継がれていくことを可能にするだろう。学びのコミュニティという場で、そういういのちを持った学びが生まれることを目指していきたいと思う。

(文責：光永 雅子)



民俗衣装

韓国料理



写真集 in 珍島

発表は韓国語及び英語で行われました



祭祀（再現）の様子



体も心も大きな、  
温かいお人柄の  
チョン・ギョンス先生と

★興味を持たれた方は学生支援室 光永までどうぞ

\*\*\*\*\*

『恋のうた学習会』

第1回目、今週です!

日時：11月20日（金）

15:00～16:30頃

場所：学生支援室

堤 和博先生をお招きします。

お気軽にご参加ください!!

～編集後記～

急に寒さが厳しくなってきました。寒さが増すにつれ、食欲も上り坂になっていくのは私だけではないはず…徳島にはおいしい食べ物がたくさんありますが、柿もそのひとつ。甘い柿の時期が過ぎ、渋柿の季節になりました。干し柿を作ったことがない私のために、社会人の方が“渋柿作りセット”なるものを持って来てくださいました。先日、教えて頂いた通りに下準備して、ベランダに干してみました。どんな出来になるのか楽しみです。人から人へ、小さな知が継承された出来事でした。（境）